

## 1 た・づ・な

### 「生産地の現状と向かうべき方向」

日本中央競馬会日高育成牧場

場 長 朝 井 洋



#### 競走馬生産界の低迷と光

軽種馬生産者がおもな会員である日本軽種馬協会会員数は、1973年の3,696名をピークとして、2007年末現在には1,388名にまで減少している。このうち、日高地区の会員数は956名と大多数であるが、四十年ぶりに1,000名を割ったという。一方、年間のサラブレッド生産頭数は、1万頭を下回ってすでに久しく、2007年は7,516頭にまで減少した。この約80%を占める日高地区の生産事情も推して知るべしである。このように、競走馬の生産は数字の上では明らかな縮小傾向が見て取れ、その波は中小規模の生産牧場にとってとくに厳しいものとなっている。

こうしたなか、去る6月1日に行われた第75回日本ダービーでは浦河産馬であるディープスカイが見事な勝ち方で優勝し、徐々に日高東部地区に明るい話題を提供してくれた。同馬を生産した(有)笠松牧場は比較的新しい牧場ながら、馬のストレスを少なくする飼養管理方法の改善や放

牧地の改良に取り組んでいる。このような牧場からダービー馬が生産されたことは、新たな気持ちで強い馬づくりを目指す生産者に勇気を与えた。

まさに、平成17年度から開始されている競走馬生産振興事業に含まれる軽種馬生産構造改革支援事業では、意欲的な複数の軽種馬生産牧場が互いの利点を活かすなどの創意工夫や組織化による強い馬づくりを推進し、健全で頑強な経営基盤を築いていこうとする事業を資金的に支援している。昨年までの3年間で、日高全域にわたる17件の個別事業についての助成を終え、今年度以降さらに十数件の申請があるという。これらの個別事業では、安全に昼夜放牧を行っていくための放牧地拡大にともなう牧柵整備や飼養管理方法の改善、生産部門や中期育成部門など分業化のための施設や機材整備、自己所有馬から預託繁殖牝馬繋養のためのシステムづくりなどが盛り込まれている。

## 生産地再生に向けた産みの苦しみ

このような事業助成を受けなくとも、最近では生産馬の昼夜放牧に踏み切っている牧場を目にするようになってきた。すでに陽が落ち、薄暗くなった放牧地に馬の影を見かけることが多い。導入当初に心配された放牧中の事故はあまり聞かない。

競走馬生産に対する危機感が高まり、これを憂慮する牧場が、苦しい状況下で何とか踏みとどまり、必死に対策を講じている姿が見えてくる。このような牧場のニーズに応え、強い馬づくりに必要な飼養管理技術をはじめ、確かな装削蹄や獣医技術の普及に努める必要がある。

上述の競走馬生産振興事業の一環として日本軽種馬協会が事業主体となって実施している軽種馬経営高度化指導研修事業の中では、飼養管理指導者の養成を図っている。養成を受ける者（カウンターパート）は、ケンタッキー州を本拠地として世界中で競走馬生産のコンサルタント業務を営むケンタッキー・イクワイン・リサーチ社から定期的に派遣される技術者とともに、日高地区のモデル牧場を巡回指導しながら技術を学んでいる。すでに第1期を終え4名のカウンターパートが研修を修了した。日本軽種馬協会静内種馬場に新設された軽種馬生産技術総合研修センターを

拠点として、彼らが指導者の核となり、強い馬づくりの旗手となって活躍する日が待ち遠しい。しかし、急を要するということも念頭に置いておかなければならない。

このように、厳しい状況ながらも、軽種馬生産地は生まれ変わろうともがいている。

## 夢と感動とともに

日高育成牧場においても、従来行ってきた育成後期のみでの育成業務を見直し、自ら生産する馬（平成21年以降の産駒）を利活用しながら、育成初期から後期まで一貫した最良と考えられる育成方法を実践し、これを競走条理で検証することとした。この目的とするところは、強い馬づくりにとって重要なステージである育成初期から中期にかけての飼養管理技術を効率的に普及することに他ならない。軽種馬生産地が変わろうとする中、我々も変化していかなければならない。

ファンに愛される、強くかつ魅力的な競走馬を生産していくために、我々も軽種馬生産地で生産者とともにもがき新たな競走馬生産地の構築に努力していきたい。生産地から夢と感動を日本のみならず世界中に届け、ひいては我が国の競馬の発展につながることを信じて。